

06007a2

薬用植物カンゾウの短期栽培を可能にする微生物接種技術の基盤構築

1 代表機関・研究統括者

国立大学法人佐賀大学 鈴木章弘

2 研究期間：令和6年度～令和8年度（3年間）

3 研究目的

圃場栽培において、薬用植物カンゾウと根粒菌を共生させることにより、カンゾウの生長が促進され、主な薬効成分のグリチルリチン酸（GL）の生産が活発になる条件を解明する。

4 研究内容及び実施体制

① 根粒菌接種による GL 生産活性化のメカニズム

一般消費者へ説明することを念頭に、根粒菌を接種することによってなぜ GL 生産が活発になるのかを明らかにする。

（佐賀大学農学部）

② 圃場栽培を見据えた根粒菌接種苗作出の条件

カンゾウの栽培品種を用いて、圃場栽培に適した根粒菌接種条件を明らかにする。

（佐賀大学農学部）

③ 根粒菌接種苗の圃場における長期栽培

圃場における栽培をおこなってバイオマス生産と GL 含量を評価し、最適な収穫のタイミングを解明する。

（佐賀大学農学部、Wismettac フーズ株式会社）

5 最終目標

カンゾウの生産には通常3年以上の期間が必要である。根粒菌の接種技術を用いて、その期間を半分以下にまで短縮することを目標とする。

6 期待される効果・貢献

我が国は薬用植物カンゾウの大消費国であるが、その入手はほぼ100%を中国に依存している。もし、本研究の成果により、令和15年度には栽培面積1,000ha、国産比率86%に達すると試算される。

背景

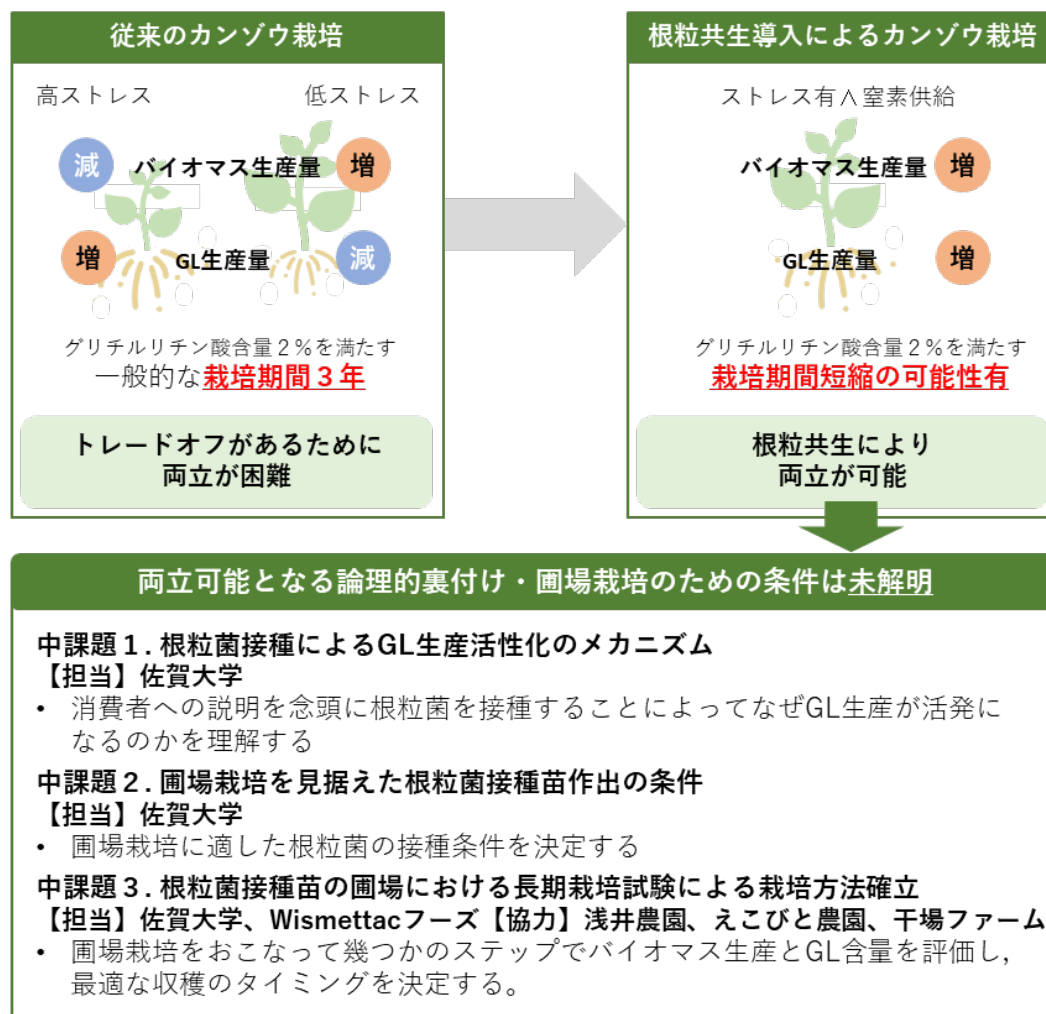
薬用植物カンゾウは日本に自生しておらず、ほぼ100%を中国から輸入しているが、中国では自生種の乱獲により絶滅が危惧され、さらに良質なカンゾウが減少し、カンゾウが「レアプラント化」している。

研究代表者らは日本でのカンゾウ栽培に向け、従来の栽培方法の課題を解消する可能性を有する技術「根粒菌接種法」を開発した。

研究の目標

「根粒菌接種法」を用いることによって、バイオマス生産とグリチルリチン酸（GL）生産を両立させ、そのメカニズムを明らかにし、カンゾウ栽培期間の大幅な短縮を達成すること。

研究内容の概要・参画研究機関の役割と連携関係



本研究の成果に基づき 社会実装・実用化される 技術の内容及びその時期

国内でのカンゾウ栽培の実現に資する根粒菌接種法を用いたカンゾウ栽培技術

【令和8年度】

実用化されることによる波及効果、 国民生活等への貢献

- ・ 日本国内のカンゾウ原料を使用する実需化の調達課題解決への寄与
- ・ 国内での研究結果確認後、国外での生産を通じて海外マーケットに横展開することで化粧品、甘味料、漢方等の世界的需要の高まり（医療需要中心）に貢献